

2 病虫害発生予察

農業生産の安定と生産性の向上を図るとともに、高品質で安全・安心な農産物を生産するため、主要 16 作物に被害を与える 167 病虫害の発消長や農作物の生育状況等を調査した。これらの調査結果と病虫害の生態、気象の経過と予報等を基に、病虫害の発生時期や発生量を予察し、生産者を始め農業団体や市町村、関係機関等に情報を提供し、病虫害の的確な防除を推進した。

(1) 対象作物及び有害動植物

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
普通作物	水 稲	いもち病、紋枯病、もみ枯細菌病、縞葉枯病、ばか苗病、稲こうじ病、ニカメイガ、セジロウンカ、トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ、イネミズゾウムシ、コブノメイガ、フタオビコヤガ、斑点米カメムシ類（アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシ）	イチモンジセセリ（イネツトムシ）、スクミリンゴガイ
	麦	うどんこ病、赤かび病	黒節病、黒穂病類（裸黒穂病、なまぐさ黒穂病）、アブラムシ類（ムギヒゲナガアブラムシ、ムギクビレアブラムシ）、ムギダニ、シロトビムシ類
	小 麦		さび病類（赤さび病）、縞萎縮病
	大 麦		さび病類（黄さび病、小さび病、黒さび病）、縞萎縮病、斑葉病
	かんしょ	ハスモンヨトウ	立枯病、つる割病、イモキバガ（イモコガ）、ナカジロシタバ、食葉性チョウ目幼虫
	大 豆	吸実性カメムシ類（ホソヘリカメムシ、アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ミナミアオカメムシ）、アブラムシ類（ダイズアブラムシ）、ハスモンヨトウ	ウイルス病、べと病、紫斑病、立枯性病害、葉焼病、茎疫病、シロイチモジマダラメイガ、マメシンクイガ、ウコンノメイガ、食葉性チョウ目幼虫、コガネムシ類（アカビロウドコガネ、アオドウガネ、ドウガネブイブイ、オオクロコガネ、ヒメコガネ、マメコガネ）、ダイズサヤタマバエ

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
果樹等作物	なし	黒斑病、黒星病、シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ）、ハダニ類（カンザワハダニ、ミカンハダニ、ナミハダニ、リンゴハダニ）、ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）、アブラムシ類（ナシアブラムシ、ワタアブラムシ、ユキヤナギアブラムシ）	赤星病、輪紋病、うどんこ病、カイガラムシ類（クワコナカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ）、ニセナシサビダニ
	茶	炭疽病、ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、ハダニ類（カンザワハダニ）、チャノホソガ	もち病、輪斑病、ヨモギエダシヤク、カメムシ類（ツマグロアオカスミカメ）、チャノミドリヒメヨコバイ、アザミウマ類（チャノキイロアザミウマ）、クワシロカイガラムシ、チャトゲコナジラミ
野菜	トマト	疫病、灰色かび病、葉かび病、アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ワタアブラムシ）、ハスモンヨトウ、コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、オオタバコガ	萎ちょう病類、青枯病、うどんこ病、黄化葉巻病、ハモグリバエ類、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ）
	なす	うどんこ病、灰色かび病、アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ、チューリップヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシ）、ハスモンヨトウ、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、ハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ）、オオタバコガ	半身萎ちょう病、青枯病、褐紋病、褐色腐敗病、すすかび病、半枯病、ホコリダニ類、ハモグリバエ類

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
野菜 （ 続 き ）	きゅうり	べと病、うどんこ病、灰色かび病、 褐斑病、アブラムシ類（ワタアブ ラムシ、モモアカアブラムシ）、 ハスモンヨトウ、コナジラミ類 （オンシツコナジラミ、タバココ ナジラミ）、アザミウマ類（ミカ ンキイロアザミウマ、ミナミキイ ロアザミウマ）	菌核病、モザイク病、黄化えそ病、 退緑黄化病、ハモグリバエ類、ハダ ニ類（ナミハダニ）、食葉性チョウ目 幼虫
	ブロッコリー	コナガ、ハスモンヨトウ、ヨトウ ガ、オオタバコガ、シロイチモジ ヨトウ	黒腐病、べと病、軟腐病、花蕾腐敗 病、黒斑細菌病、黒すす病、アブラ ムシ類（モモアカアブラムシ、ダイ コンアブラムシ、ニセダイコンアブ ラムシ）、ハイマダラノメイガ
	ねぎ	さび病、黒斑病、べと病、アブラ ムシ類（ネギアブラムシ、ワタア ブラムシ）、ハスモンヨトウ、ア ザミウマ類（ネギアザミウマ）、 シロイチモジヨトウ	萎縮病、軟腐病、小菌核腐敗病、白 絹病、黒腐菌核病、ネギコガ、ハモ グリバエ類（ネギハモグリバエ）
	さといも	ハスモンヨトウ	汚斑病、疫病、アブラムシ類（モモ アカアブラムシ、ダイコンアブラム シ、ニセダイコンアブラムシ）、ハ ダニ類（カンザワハダニ）
	ほうれんそう	アブラムシ類（モモアカアブラム シ、ダイコンアブラムシ、ニセダ イコンアブラムシ）、ハスモンヨ トウ	立枯病、べと病、アザミウマ類（ミ ナミキイロアザミウマ）、ケナガコ ナダニ、シロオビノメイガ

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
野菜 （続き）	いちご	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、アブラムシ類（ワタアブラムシ、イチゴネアブラムシ）、ハスモンヨトウ、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ）、ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）	萎黄病、輪斑病、ホコリダニ類、コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）
	小計	16 作物、76 病害虫	16 作物、91 病害虫
	合計	16 作物、167 病害虫	

(注1) 「国の指定有害動植物」とは、国が指定有害動植物発生予察事業計画で定めた発生予察事業の対象病害虫。

(注2) 「県の有害動植物」とは、埼玉県が国と協議して設定した発生予察事業の調査対象病害虫。

(2) 予察ほ場及び巡回調査地域等

ア 県予察ほ場

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
	麦	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
果樹特産	なし	1	久喜市六万部（農業技術研究センター久喜試験場）
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
野 菜	トマト	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	きゅうり	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	いちご	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
計		7	

イ 予察灯設置ほ場

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻	6	川越市南田島、川島町上八ツ林 本庄市児玉町吉田林、熊谷市玉井、加須市大越、春日部市樋籠
果樹特産	な し	3	上里町長浜、春日部市内牧、久喜市六万部
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
計		10	

(注) () 書きのある予察灯は、() 内の機関が調査している予察ほ場である。

ウ 巡回調査地域

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻 (早植)	8	川越市小中居、川島町西谷、吉見町西吉見、熊谷市中曾根、加須市麦倉、春日部市樋籠、幸手市神扇、吉川市中井
	水 稻 (普通植)	6	坂戸市横沼、毛呂山町箕和田、嵐山町廣野、本庄市児玉町吉田林、美里町関、加須市大越
	麦 (大麦)	3	川島町芝沼、行田市上池守、白岡市太田新井
	麦 (小麦)	8	川越市古谷上、坂戸市片柳、川島町鳥羽井新田、本庄市児玉町吉田林、熊谷市飯塚、熊谷市樋春、行田市前谷、蓮田市駒崎
	かんしょ	1	三芳町上富
	大 豆	6	川越市古谷上、滑川町中尾、熊谷市樋春、加須市間口、蓮田市駒崎、白岡市太田新井
果樹特産	な し	7	鴻巣市常光、神川町植竹、上里町長浜、加須市鴻茎、加須市上種足、春日部市内牧、白岡市下大崎
	茶	4	所沢市下富、狭山市南入曽、入間市根岸、日高市森戸新田
野 菜	トマト	7	川越市南田島、川島町上大屋敷、本庄市小和瀬、上里町勅使河原、深谷市岡、加須市飯積、越谷市東町
	な す	3	本庄市児玉町小平、春日部市飯沼、杉戸町大塚
	きゅうり	7	川越市大中居、川島町吉原、本庄市仁手、熊谷市樋春、深谷市高畑、深谷市下手計、加須市不動岡
	ブロッコリー	3	本庄市田中、深谷市山河、吉川市川藤
	ね ぎ	5	さいたま市岩槻区大野島、本庄市田中、熊谷市飯塚、深谷市新戒、越谷市中島
	さといも	3	川越市中福、所沢市下富、狭山市堀兼
	ほうれんそう	3	川越市中福、狭山市堀兼、深谷市下手計
	いちご	5	吉見町久保田新田、吉見町一ツ木、本庄市仁手、加須市本郷、久喜市菖蒲町小林
計	79		

(注) 水稲（早植）：5月中旬までの移植、水稲（普通植）：5月下旬以降の移植。

エ フェロモントラップ等調査

対象作物	対象病害虫名	箇所数	設置場所
水 稲	フタオビコヤガ	2	熊谷市中曽根、加須市戸室
な し	ナシヒメシンクイ	4	鴻巣市常光、上里町長浜、加須市鴻荃、春日部市内牧
	果樹カメムシ類	1	寄居町鉢形
茶	チャハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノコカクモンハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノホソガ	2	所沢市下富、入間市根岸
野 菜	オオタバコガ	4	本庄市児玉町小平、深谷市山河、越谷市中島、杉戸町大塚
	ハスモンヨトウ	3	熊谷市樋春、深谷市山河、久喜市菖蒲町小林
	シロイチモジヨトウ	3	深谷市新戒、越谷市中島、杉戸町大塚
計		23	

(3) 令和4年度の主な病害虫の発生とその防除対策

ア 主要病害虫の発生と防除対策の概要

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	葉いもち	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い7月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	6月下旬～7月上旬が高温少雨に経過したため、感染好適日が平年の半数以下となり、発生が平年よりやや少なくなった。	抵抗性品種への転換が進みつつある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	穂いもち	平年:－ 前年:－	平年:並 前年:－	散発にとどまった。	葉いもちの発生量は平年よりやや少なく、葉いもちの感染好適日も平年の半数以下であったためと考えられる。	感染好適日の発生状況を15日毎に発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	紋枯病	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年より早い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年より多かった。	6月下旬から8月中旬まで高温に経過したため、発生が助長された。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ばか苗病	平年:－ 前年:－	平年:並 前年:－	発生が確認されなかった。	種子更新と温湯消毒の徹底により密度が低下した。	種子更新と種子消毒の徹底を情報発信した。JA米では種子更新が徹底されている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	もみ枯細菌病	平年:－ 前年:－	平年:－ 前年:－	発生が確認されなかった。	種子更新と温湯消毒の徹底により密度が低下した。また、出穂期が高温、少雨となり、発生を抑制した。	種子更新と種子消毒の徹底を情報発信した。また普及している育苗箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	縞葉枯病	平年:並 前年:早	平年:やや少 前年:少	平年並みの6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	ヒメビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は過去10年で最も低く、ヒメビウンカの本田での発生量もやや少なかったため、本病の発生もやや少なくなった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。抵抗性品種への転換が進みつつあるが、感受性品種ではウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	稲こうじ病	平年:－ 前年:－	平年:－ 前年:－	発生が確認されなかった。	幼穂形成期から出穂期までの降雨日数が少なかった(連続した降雨は7月12～17日のみ)ため、発生が抑制された。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ニカメイガ	平年:早 前年:早	平年:多 前年:並	平年より早い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。予察灯誘殺数が平年より多く、本田での発生量も多い結果となった。	この作型では秋耕が定着しているため、水田内の越冬場所が減少しており、近年少発生傾向であったが、品種構成の変化(稈の太い品種の作付)などにより、世代を重ねるごとに増加した。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	セジロウンカ	平年:早 前年:やや早	平年:並 前年:多	平年より早い7月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並であった。	セジロウンカ・トビロウンカ飛来予測システムでは、6月までの飛来予測日数は1日と過去10年で2番目に少なかった。7月以降の飛来予測日数は不明であるが、予察灯にも誘殺されるようになり、平年並に本県への飛来があったと考えられる。	セジロウンカ・トビロウンカの飛来予測日数の動向を15日毎に発表し、注意喚起した(システム障害により情報発信は6月まで)。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	トビロウンカ	平年:－ 前年:－	平年:－ 前年:－	発生が確認されなかった。	セジロウンカ・トビロウンカ飛来予測システムでは、6月までの飛来予測日数は1日と過去10年で2番目に少なかった。7月以降の飛来予測日数は不明であるが、予察灯への誘殺もなかったため、本県への飛来が少なかったと考えられる。	セジロウンカ・トビロウンカの飛来予測日数の動向を15日毎に発表し、注意喚起した(システム障害により情報発信は6月まで)。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ヒメビウンカ	平年: やや遅 前年: やや早	平年: やや少 前年: 並	平年よりやや遅い6月第3半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	5月に調査した麦ほ場での成・幼虫密度は過去10年でも比較的高かったが、6月下旬～7月上旬の異常高温による発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量はやや少なかった。	保毒率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ツマグロヨコバイ	平年: やや遅 前年: やや早	平年: 並 前年: やや多	平年よりやや遅い6月の第3半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並となった。	全作型でのツマグロヨコバイ抵抗性品種作付割合は約5割で、耕種的防除による防除圧が高まっている。しかし、本作型では抵抗性品種作付割合が低いため、普通期栽培に比べると発生量が多くなる傾向がある。	ヒメビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	斑点米カメムシ類	平年: 遅 前年: 並	平年: 少 前年: 少	平年より遅い6月第4半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は6,7月で最大となった。発生量は平年より少なかった。アカヒゲホソドリカスミカメの発生が多く、山沿いではクモヘリカメムシの発生が見られる。	7月中旬に実施した斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査では比較的多かったが、7月12～17日の連日の大雨により、本田への飛び込みが抑制された可能性がある。	斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査及び防除情報を発表し、注意喚起した。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イチモンジセセリ	平年: — 前年: —	平年: やや少 前年: —	6月第6半旬に初発生を確認したが、散發程度で拡大には至らなかった。	近年は年々発生量が減少傾向にある。常発地での箱施薬剤利用が定着し、防除が徹底されているためと思われる。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	フタオビコヤガ	平年: — 前年: —	平年: やや少 前年: —	フェロモントラップの誘殺数は、平年より少なかった。現地水田では発生が確認されなかった。	近年は年々発生量が減少傾向にある。常発地での箱施薬剤利用が定着し、防除が徹底されているためと思われる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	コブノメイガ	平年: — 前年: —	平年: 並 前年: —	発生が確認されなかった。この作型では、過去10年でも発生が確認されていない。	近年は年々発生量が減少傾向にある。常発地での箱施薬剤利用が定着し、防除が徹底されているためと思われる。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イネミズゾウムシ	平年: 早 前年: 早	平年: 並 前年: 多	平年より早い4月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は6月で最大となった。発生量は平年並であった。	3～4月の気温が高かったため、越冬成虫の本田への飛び込みが早まったが、近年は発生量が減少傾向にあったため、発生量は平年並となった。	越冬場所(森林、堤防沿い)に近接する常発地帯では、育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	スクミンゴガイ	平年: — 前年: —	平年: 少 前年: 少	発生量は平年より少なく、欠株等の被害がほとんど見られなかった。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。12月下旬～1月上旬および2月の気温が低かったため越冬個体数が減少し、発生が抑制された。さらに、本作型の常発地は移植時期が5月初旬までの地域が多いが、5月上旬の低温で本田への侵入が遅れたため、被害につながらなかった。	耕種的防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	葉いもち	平年: 遅 前年: やや遅	平年: やや少 前年: 少	平年より遅い7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	6月下旬～7月上旬が高温少雨に経過したため、感染好適日が平年の半数以下となり、発生が抑制された。	ほぼ抵抗性品種となっているが、一部に常発地がある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	穂いもち	平年: 遅 前年: 遅	平年: 並 前年: 少	平年より遅い9月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年並であった。	葉いもちの発生量はやや少なかったが、9月の降水量が多かったため、平年並の発生となった。	感染好適日の発生状況を15日毎に発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につながった。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	紋枯病	平年: 遅 前年: 遅	平年: 並 前年: 多	平年より遅い8月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年並であった。	9月が平年より高温多雨であったため、後期に発生が助長された。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	ばか苗病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	種子更新と温湯消毒の徹底により菌密度が低下した。	温湯消毒の実施と育苗箱施用薬剤の励行を実施。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	もみ枯細菌病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	種子更新と温湯消毒の徹底により菌密度が低下した。	種子更新と種子消毒の徹底を情報発信した。また普及している育苗箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	縞葉枯病	平年:遅 前年:早	平年:やや少 前年:少	平年より遅い7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は過去10年で最も低く、ヒメトビウンカの本田での発生量もやや少なかったため、本病の発生もやや少となった。	ほぼ抵抗性品種となっている。保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、感受性品種を作付けている場合は防除に取り組むよう呼びかけている。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	稲こうじ病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	幼穂形成期から出穂期までの降雨日数が少なかったため、発生が抑制された。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	ニカメイガ	平年:早 前年:—	平年:多 前年:—	平年より早い8月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。本年は予察灯誘殺数が平年より多く、本田での発生量も多い結果となった。	この作型では小麦二毛作が多く、収穫後すぐに耕耘するため、平年の発生量が非常に少ない。少しでも発生すると、平年比多となる。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	セジロウンカ	平年:遅 前年:やや遅	平年:並 前年:やや少	平年より遅い7月第4半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。	セジロウンカ・トビイロウンカ飛来予測システムでは、6月までの飛来予測日数は1日と過去10年で2番目に少なかった。7月以降の飛来予測日数は不明であるが、予察灯にも誘殺されるようになり、平年並みに本県への飛来があったと考えられる。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測日数の動向を15日毎に発表し、注意喚起した(システム障害により情報発信は6月まで)。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	トビイロウンカ	平年:— 前年:—	平年:多 前年:—	9月第3半旬に水田での初発生を確認した。一部地域でのみの確認であったため、被害は確認されなかった。	セジロウンカ・トビイロウンカ飛来予測システムでは、6月までの飛来予測日数は1日と過去10年で2番目に少なかった。7月以降の飛来予測日数は不明であるが、予察灯への誘殺もなかったため、本県への飛来が少なかったと考えられる。平年の発生量が非常に少ないため、少しでも発生すると平年比多となる。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測日数の動向を15日毎に発表し、注意喚起した(システム障害により情報発信は6月まで)。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	ヒメトビウンカ	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:並	7月第1半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年でも比較的高かったが、6月下旬～7月上旬の異常高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量はやや少となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	ツマグロヨコバイ	平年:やや早 前年:早	平年:やや少 前年:並	平年よりやや早い6月第4半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	全作型でのツマグロヨコバイ抵抗性品種作付割合は約5割であるが、本作型では抵抗性品種作付割合が高いため、耕種的防除による防除圧が高まっている。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	斑点米カメムシ類	平年:やや遅 前年:遅	平年:多 前年:並	平年よりやや遅い7月第1半旬に水田での初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年より多かった。	7月中旬に実施した斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査では比較的多かった。本田へ飛び込む8月が高温少雨で経過したため、発生が助長された。	斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査及び防除情報を発表し、注意喚起した。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	イチモンジセセリ	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。一部地域でのみでの発生であった。	8月が高温少雨に経過したため、山沿い地域で発生が助長された。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	フタオビコヤガ	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	7月第1半旬に一部地域で散発程度の発生を確認したが、その後の発生は見られなかった。	近年は発生量が減少傾向にある。常発地での育苗箱施用薬剤利用が定着し、防除が徹底されているためと思われる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	コブノメイガ	平年:遅 前年:—	平年:並 前年:—	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。一部地域でのみの発生であった。	多収性品種等多肥栽培の晩生品種に発生したが、被害葉率1%程度と非常に軽微な被害となっている。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イネミズゾウムシ	平年:— 前年:早	平年:やや少 前年:—	6月第1半旬に一部地域で散発程度の発生を確認したが、その後の発生は見られなかった。	従来からこの作型ではあまり発生が見られない。	この作型ではあまり発生が見られないため、特に防除はしていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	スクミンゴガイ	平年:— 前年:—	平年:少 前年:少	発生量は平年より少なかったが、一部に壊滅的被害を受けたほ場が見られた。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地帯は限られている。12月下旬～1月上旬および2月の気温が低かったため越冬個体数が減少したことで発生が抑制された。昨年被害が多かった地域で、今年休耕したほ場の近接ほ場で、ほとんど欠株となったほ場が数筆見られた。近接ほ場でもほとんど被害がなかったほ場もあるため、防除対策を怠ったほ場が集中的に加害されたものと思われる。	耕種の防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除を助成する地域防除協議会もある。
麦	黒さび病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
麦	赤さび病	平年:早 前年:やや遅	平年:やや少 前年:少	平年より早い4月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生面積は平年よりやや少なかった。	3月の高温でムギが軟弱に生育し、4月上旬に降水量が多かったことから発生時期が早まった。その後も感染好適条件が継続したが、昨年の発生量が少なかったため、菌密度が低く、発生量の増加には至らなかった。	赤さび病との同時防除可能な薬剤の選択。
麦	黄さび病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
麦	小さび病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
麦	うどんこ病	平年:やや遅 前年:遅	平年:多 前年:多	平年よりやや遅い4月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年より多かった。	昨年の発生量が多かったため、菌密度が高く、3月の高温でムギが軟弱に生育したことにより発生が助長された。	赤さび病の防除で同時防除されている。
麦	赤かび病	平年:やや遅 前年:—	平年:多 前年:—	平年よりやや遅い4月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年より多かった。	出穂期の4月下旬が高温多雨だったため、感染が助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。
麦	黒穂病類	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	黒節病	平年:早 前年:並	平年:やや少 前年:少	平年より早い2月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	種子消毒の不徹底により、一部地域にて発生した。	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	オオムギ縞萎縮病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	近年、抵抗性品種や「彩の星」の導入より発生が極少となっている。
麦	コムギ縞萎縮病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	近年、抵抗性品種「さとのそら」の導入より発生が極少となっている。
麦	オオムギ斑葉病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
麦	アブラムシ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:やや少	平年より遅い4月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は4月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	2月は気温が低く、3月は高温であったものの4月上旬まで日によって強い降雨があったため、初発は遅かった。発生後も4月下旬は日によって強い降雨があり、5月上旬は低温で経過したため発生が抑制された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
麦	ムギダニ	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	一部地域で散発程度の発生が確認された。	例年発生が始まる2月が低温で、中旬頃にまとまった降雨があったほか、3月中旬から4月上旬まで日によって強い降雨があったため、発生が抑制された。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
麦	シロトビムシ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
かんしょ	つる割病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	立枯病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	イモキバガ (イモコガ)	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	ハスモンヨトウの防除を中心に実施している。
かんしょ	ナカジロシタバ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	ハスモンヨトウの防除を中心に実施している。
かんしょ	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	7月第3半旬に初発が確認された。適期防除出来た圃場では発生が抑えられたが、被害の多い圃場も散見された。	7～8月に高温少雨となる時期が度々あり、発生が促進された。防除のタイミングによって発生程度に大きく差が出た。	薬剤防除を実施している。
かんしょ	食葉性チョウ目幼虫	平年:遅 前年:遅	平年:— 前年:多	平年より遅い8月第1半旬に初発を確認し、その後も継続して発生がみられたため、発生量は前年より多かった。	7、8月に高温少雨となる時期が度々あり、発生が促進された。	ハスモンヨトウの防除を中心に実施している。
大豆	紫斑病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	奨励品種が紫斑病に強い「里のほほえみ」に切り替わった。種子消毒、無人ヘリによる一斉防除を実施している。
大豆	立枯性病害	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	種子消毒を実施している。
大豆	べと病	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:やや少	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は11月の子実調査で最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	主力品種が感受性の「里のほほえみ」や在来品種のため、発生が増加傾向にある。7月中旬のまとまった強い降雨により、播種が遅れたり播き直しが行われ、8月は高温少雨傾向で経過したため、初発は遅れた。9月は中下旬に曇雨天や大雨があったため、発生が助長された。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種防除を実施している。
大豆	葉焼病	平年:遅 前年:並	平年:多 前年:多	平年より遅い9月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生面積は平年より多かった。	9月に降雨日が多く、気温が下がってくる中下旬が高温傾向だったため、発生が助長された。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種防除を実施している。
大豆	ウイルス病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	8月第4半旬に、一部地域でモザイク葉の発生を確認した。褐斑粒の発生は見られなかった。	8月は高温少雨傾向で経過したためアブラムシ類の発生が助長され、9月は長雨で発生が抑制されたため、極少発生にとどまった。	—
大豆	茎疫病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
大豆	アブラムシ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い9月第3半旬に、一部地域で発生を確認した。	7月中旬のまとまった強い降雨により、播種が遅れたりまき直しが行われ、大豆の生育が遅れたため、初発は遅かった。9月は中下旬に曇雨天や大雨があったため、発生が抑制された。	播種時の薬剤処理と適期防除を実施している。
大豆	コガネムシ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	平年より遅い8月第4半旬に初発生を確認した。発生面積は8月が最大となり、その後9月に減少し収束した。	7月中旬のまとまった強い降雨により、播種が遅れたり播き直しが行われ、大豆の生育が遅れたため、初発は遅かった。8月は高温少雨傾向で経過したため、発生が助長された。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	ハスモンヨトウ	平年:やや早 前年:並	平年:並 前年:少	平年よりやや早い8月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。フェロモントラップの誘殺数は平年並で、発生量は並であった。	フェロモントラップの誘殺が平年より遅かったため、2月の低温により近隣越冬地の越冬量が抑制されたと推察される。このため、高温期の発生量も抑制傾向となった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
大豆	食葉性チョウ目幼虫	平年:やや早 前年:並	平年:やや多 前年:並	平年よりやや早い8月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量はやや多かった。	6月中旬～7月上旬及び8月の高温少雨傾向により、オオタバコガ、シロイチモジヨトウのフェロモントラップ誘殺数が平年より多く、ほ場での発生も助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。オオタバコガは注意報を発表し、防除を呼びかけた。
大豆	ダイズサヤタマバエ	平年:遅 前年:遅	平年:少 前年:少	平年より遅い10月第4半旬に、一部地域で発生が確認された。発生量は平年より少なかった。	大豆の生育が遅れたことと、9月は中下旬の降雨が多かったため初発生が遅く、10月の気温が低かったため発生が抑制された。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	マメシンクイガ	平年:遅 前年:やや遅	平年:多 前年:並	11月の子実調査で発生が確認された。発生量は平年より多かった。	大規模粗放栽培でほとんど防除を行っていない調査地点で子実の被害が大きかった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。
大豆	シロイチモジマダライガ	平年:遅 前年:早	平年:並 前年:多	平年より遅い9月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は11月の子実調査で最大となった。発生量は平年並であった。	9月は非常に強い降雨が多かったため発生は抑制されたが、平年発生量の絶対値が小さいため平年比は並となった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。
大豆	吸実性カメムシ類	平年:遅 前年:遅	平年:多 前年:多	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は11月に行った子実調査で最大となった。発生量は平年より多かった。	7月中旬のまとまった強い降雨により、播種が遅れたり播き直しが行われ、大豆の生育が遅れたため、初発は遅かった。近年、収穫期近くまで加害するミナミアオカメムシが急速に増加しており、11月の気温が高く経過したため、子実被害の発生を助長した。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除は地域に定着している。
大豆	ウコンノメイガ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
なし	黒斑病	平年:— 前年:遅	平年:— 前年:—	前年より遅い10月第1半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	抵抗性品種であったが、わずかに病斑が確認された。	抵抗性品種が栽培されている。
なし	黒星病	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い6月第3半旬に初発を確認したが、7月下旬以降は発生が確認されなかったため、発生量は平年よりやや少なかった。	6月上旬の低温多雨により発生が助長されたが、その後は高温少雨や薬剤防除により抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	赤星病	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:並	平年より遅い6月第3半旬に初発を確認した。その後の発生量は平年よりやや少なくな推移した。	5月下旬・6月上旬の多雨により発生が助長されたが、その後の少雨や薬剤防除により抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	うどんこ病	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:少	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認した。その後急増したが、発生量は平年並となった。	8月の少雨により発生が助長された。併せて8月は収穫最盛期にあたるため、適期防除が難しく発生量が増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	輪紋病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
なし	シンクイムシ類	平年:遅 前年:—	平年:多 前年:—	平年より遅い8月第1半旬に初発を確認した。その後の発生量は平年より多く推移した。	3月以降高温となる時期が多く生育が促進され、大雨や台風などの減少要因もなかったことから、発生量が増加した。	フェロモントラップによる発生状況を参考に、防除が実施されている。
なし	ハマキムシ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	6月第1半旬に初発を確認した。その後の発生は確認されず、発生量は平年並であった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は一部にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ハダニ類	平年:並 前年:並	平年:多 前年:並	平年並の5月第4半旬に初発を確認した。その後の発生量は平年より多く推移した。	3月以降高温となる時期が多く生育が促進され、大雨や台風などの減少要因もなかったことから、発生量が増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	カイガラムシ類	平年:並 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年並の9月第3半旬に初発を確認した。その後の発生量は平年よりやや少なくな推移した。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は一部にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	アブラムシ類	平年:並 前年:遅	平年:やや少 前年:並	平年並の4月第3半旬に初発を確認した。6月に急減した後、8月下旬に一部ほ場で再び増加したが、発生量は平年よりやや少なくな推移した。	3月以降高温となる時期が多く生育が促進されたが、6月上旬の多雨により発生量は抑制された。8月の少雨により再び増加したが、発生は一部にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
なし	ニセナシサビダニ	平年:並 前年:並	平年:— 前年:—	平年並の6月第1半旬に初発を確認し、その後も一部ほ場で継続して発生が確認された。	5月下旬の高温により発生がみられたが、定期的な薬剤散布により発生量が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	果樹カメムシ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	果実被害の発生が確認されなかった。フェロモントラップ等による調査では、6月下旬から発生量が増加した。	本年は、他の作物でのカメムシ類の発生が多かったが、多目的防災網の普及や防除の徹底により被害は確認されなかった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に、防除が実施されている。
茶	炭疽病	平年:早 前年:遅	平年:やや多 前年:やや少	二番茶摘採以降、7月中旬から8月にかけて発生が見られた。ほ場ごとの発生量は少なかったが、全域での発生となったため発生量は平年に比べやや多となった。	7月第3半旬の降水量が平年の約3倍、8月第3半旬の降水量が平年の約4倍と集中的な降雨により、感染に好適な状況となったと思われる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	もち病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	越冬菌密度が低く、適切に防除されているためと思われる。	—
茶	輪斑病	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	8月中旬に発生量が増加した。	2番茶摘採期以降の6月下旬から7月上旬にかけ、高温少雨となったため発生の増加は見られなかったが8月第3半旬の降雨で感染好適状態が続き発生が増加した。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	チャノコカクモンハマキ	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫、第1世代成虫の発生は平年よりやや下回る発生だったが、第2世代以降の発生量は大きく下回った。	6月下旬から7月上旬にかけ真夏並の高温が続き、2番茶収穫、摘採後の整枝により物理的に防除され個体数が減ったためと思われる。	フェロモントラップデータを本県のウェブサイトに掲載し、適期防除を周知した。
茶	チャハマキ	平年:早 前年:やや早	平年:やや多 前年:やや多	ほ場での調査では、越冬世代幼虫の確認は平年より早かったが、フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫の発生時期は平年並、第1世代成虫の発生は早まった。第2世代以降発生量は大きく増えることはなく経過したが、二番茶摘採期以降、葉層を厚く残した園では発生が増加した。	6月下旬から7月上旬にかけ真夏並の高温が続き、2番茶収穫、摘採後の整枝により物理的に防除され個体数が減った。一方、葉層を厚く残した園では8月上旬から多発生の傾向が続いた。	フェロモントラップデータを本県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を周知した。
茶	チャノホソガ	平年:早 前年:早	平年:並 前年:やや少	越冬世代、第1世代成虫の発生量は平年並みだったが第2世代以降発生量は平年を大きく下回った。	6月下旬から7月上旬にかけ真夏並の高温が続き、2番茶収穫、摘採後の整枝により物理的に防除され個体数が減った。	フェロモントラップデータを本県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を周知した。
茶	チャノミドリヒメヨコバイ	平年:早 前年:早	平年:やや多 前年:並	7月、9月に多く発生した。平年に比べ秋季の発生がやや多かった。	適切な防除が行われたため、品質や収量に影響するほどの発生量には至らなかったが、7月以降、他の病害虫の発生が少なかったため薬剤による防除の時期が遅れたことが原因と思われる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を周知した。
茶	カンザワハダニ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	一部ほ場で5月下旬、8月に増加したが、発生は平年並だった。	一部ほ場では、多発生となったが、その他のほ場では、適切な防除が行われた。夏季の天敵の活動が盛んであったため、発生が抑制された。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	チャノキイロアザミウマ	平年:早 前年:並	平年:多 前年:多	7月中旬から発生が増加し、8月に多発生となった。	7月以降、他の病害虫の発生が少なかったため薬剤による防除のタイミングが遅れ、多発生につながった。	発生予察情報、病害虫防除情報等により秋季防除を指導した。
茶	ツマグロアオカスミカメ	平年:並 前年:早	平年:並 前年:多	一部の園で発生が見られ、平年並の発生となった。	適切な防除が行われたため、品質や収量に影響するほどの発生量には至らなかった。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
茶	クワシロカイガラムシ	平年:遅 前年:並	平年:並 前年:少	有効積算温度によるふ化予測では、第1世代幼虫のふ化最盛期は5月18日(平年より8日早い)、第2世代は7月26日(平年より2日早い)、第3世代は9月24日(平年より11日遅い)となった。	3月から4月にかけて、気温が高く推移したため、発生が早まったが、夏季の高温により生育が遅延した。冬季に散布する防除薬剤の普及により発生量は減少しているが、使用していないほ場では、引き続き発生がみられる。	発生予報により、注意喚起と適期防除を周知した。
茶	ヨモギエダシヤク	平年:— 前年:—	平年:多 前年:—	一部の園で発生が確認された。	本県での発生は少なく、適切に防除されているからと思われる。	—
茶	チャトゲコナジラム	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:多	裾葉に定着していたが、発生はごくわずかである。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	—
冬春トマト (長期一作)	疫病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	灰色かび病	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:少	平年並の1月第4半旬に初発が確認され、発生量は平年よりやや少なくて推移した。	2月は平年より日射量が多く、3~4月は気温が高かったことから、ハウス内湿度が上がりにくくなり発生が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト (長期一作)	葉かび病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	抵抗性品種の導入と薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト (長期一作)	青枯病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	発生ほ場では土壌消毒の対策を実施している。
冬春トマト (長期一作)	黄化葉巻病	平年:早 前年:早	平年:やや少 前年:少	平年より早い11月第1半旬に初発を確認したが、その後の発生は平年よりやや少なくて推移した。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は一部にとどまった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春トマト (長期一作)	うどんこ病	平年:早 前年:並	平年:少 前年:少	平年より早い11月第4半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が見られたが、発生量は平年より少なくなった。	平年より日射量が多く、ハウス内湿度が低下したため発生が助長されたが、薬剤防除により発生量が少ない状態で維持された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト (長期一作)	萎ちょう病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	黄化えそ病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	アザミウマ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	コナジラム類	平年:早 前年:早	平年:やや少 前年:少	平年より早い10月第4半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が見られたが、発生量は平年よりやや少なくなった。	黄化葉巻病ウイルスの媒介虫であることが認識され、防除が徹底されている。収穫期後半には高温と防除圧の低下により発生が増えた。	定期的な薬剤散布の実施と、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト (長期一作)	ハモグリバエ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	アブラムシ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	トマトサビダニ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春トマト (長期一作)	オオタバコガ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	4月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は一部にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	うどんこ病	平年:遅 前年:並	平年:多 前年:多	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認。9月に発生量が急増し平年より多くなった。	7月下旬から8月中旬までの高温で樹が過繁茂となり、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	灰色かび病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋なす	褐紋病	平年:遅 前年:—	平年:並 前年:—	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認。その後発生量は増加せず、平年並となった。	8月中旬の降雨により発生が助長されたが、一部の発生にとどまった。	—

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋なす	褐色腐敗病	平年: 早 前年: 早	平年: 多 前年: 多	平年より早い7月第1半旬に初発を確認。発生量は7月下旬に急増した。その後、増減を繰り返しながら10月まで発生が続き、平年より多くなった。	7月中下旬の高温多雨により発生量が急増したが、それ以降は雨量が多くなるたび発生が助長された。	—
夏秋なす	半身萎ちょう病	平年: 早 前年: 早	平年: 多 前年: 多	平年より早い6月第6半旬に初発が確認され、一部ほ場で発生が多くなった。その後も発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	一部のほ場で連作により発生が増加した。	抵抗性台木の利用が行われている。
夏秋なす	青枯病	平年: — 前年: —	平年: 並 前年: —	発生が確認されなかった。	—	抵抗性台木の利用が行われている。
夏秋なす	半枯病	平年: — 前年: —	平年: — 前年: —	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋なす	アザミウマ類	平年: 早 前年: やや早	平年: 多 前年: 並	平年より早い5月第1半旬に初発を確認。梅雨入りで一時減少したが、7月以降に発生量が多くなり、その後も発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	7月以降は高温少雨となる期間が度々あり、気象的な要因により発生が助長された。	天敵への影響や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	オオタバコガ	平年: やや早 前年: 早	平年: やや多 前年: 多	平年よりやや早い6月第1半旬に初発を確認。その後継続して発生し10月に急増したため、発生量は平年よりやや多くなった。	3月以降高温となる時期が多く生育が促進され、大雨や台風などの減少要因もなかったことから、世代を経るごとに発生量が多くなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ハスモンヨトウ	平年: 遅 前年: —	平年: 並 前年: —	平年より遅い8月第6半旬に初発が確認されたが、その後の発生は少なかったため、発生量は平年並となった。	—	—
夏秋なす	ハモグリバエ類	平年: — 前年: —	平年: やや少 前年: —	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋なす	アブラムシ類	平年: 早 前年: やや早	平年: 多 前年: やや多	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後急増した。梅雨入り以降は減少したが、9月下旬から増加し、平年より多い発生量となった。	3～4月の気温が高く発生時期が早まり発生量も多くなったが、その後は断続的な多雨や薬剤防除により抑制された。9月下旬からは防除圧が弱まり増加した。	—
夏秋なす	ハダニ類	平年: 早 前年: やや早	平年: 多 前年: 並	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後は防除により一時的に減少したものの、継続的に多発し、発生量は平年より多くなった。	3月以降、高温少雨となる時期が度々あり、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ホコリダニ類	平年: 遅 前年: —	平年: 並 前年: —	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認し、その後も発生が見られたが、発生量は平年並であった。	定期的な薬剤防除により発生が抑えられていたが、栽培終盤は防除圧が低くなるため発生した。	—
夏秋なす	マメハモグリバエ	平年: — 前年: —	平年: — 前年: —	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	べと病	平年: 遅 前年: 並	平年: やや多 前年: 並	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認し、その後増加し続けたため、発生量は平年よりやや多くなった。	9月の多雨や10月の低温により、多湿となり発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	うどんこ病	平年: 遅 前年: 早	平年: 並 前年: 多	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認し、その後も継続して発生したが、発生量は平年並となった。	8月の高温により一部ハウスで株が徒長し、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	モザイク病	平年: — 前年: —	平年: 並 前年: —	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	灰色かび病	平年: — 前年: —	平年: 並 前年: —	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	褐斑病	平年: 遅 前年: 遅	平年: 並 前年: 多	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認し、その後も継続して発生したが、発生量は平年並となった。	10月の低温で多湿となり、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	菌核病	平年: — 前年: —	平年: 並 前年: —	発生が確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	黄化えそ病	平年: 早 前年: 遅	平年: やや少 前年: 少	平年より早い8月第6半旬に初発を確認し、10月下旬にやや増加したが、発生量は平年よりやや少なくなった。	8月の高温少雨によりハウス周辺からの媒介虫の飛込が増え、栽培初期の発生がみられたが、薬剤防除等によりその後の増加は抑制された。	媒介虫への総合防除対策が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	退緑黄化病	平年: 遅 前年: 遅	平年: やや多 前年: 多	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認し、その後急増したため、発生量は平年よりやや多くなった。	媒介虫の飛込は平年より遅かったものの、ハウス内で継続的に発生したため、感染株が増加した。薬剤抵抗性により媒介虫の防除効果が低下している可能性もある。	媒介虫への総合防除対策が行われている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アザミウマ類	平年:早 前年:早	平年:並 前年:多	平年より早い8月第6半旬に初発を確認し、10月後半にやや増加したが、発生量は平年並となった。	ハウス周辺からの飛込により発生がみられたものの、防除対策によりその後の増加は抑制された。	物理的防除や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	コナジラミ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認し、10月に急増した後、発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	薬剤抵抗性により防除効果が低下している可能性がある。	物理的防除や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハモグリバエ類	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、11月に急増したため、発生量は平年より多くなった。	発生は一部ハウスに留まり、薬剤防除が遅れたため発生が増加した。	物理的防除や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハダニ類	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:並	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されず、発生量は平年並となった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アブラムシ類	平年:遅 前年:早	平年:並 前年:並	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されず、発生量は平年並となった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハスモンヨトウ	平年:遅 前年:—	平年:多 前年:—	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認し、その後は発生が確認されなかったが、発生量は平年より多くなった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年:— 前年:並	平年:— 前年:—	8月第6半旬に初発を確認したが、発生は一部ハウスにとどまった。	発生は一部ハウスに留まり、薬剤防除が遅れたため発生が増加した。	—
冬春きゅうり (促成栽培)	べと病	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い4月第1半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	3～4月は気温が平年より高く、十分に換気が行われたため、発生が抑制された。	循環扇の活用、換気等による温湿度管理の実施。薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	うどんこ病	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	平年より遅い3月第3半旬に初発が確認され、その後の5月に発生量が増加したため、発生量は平年よりやや多くなった。	3～4月の高温により成り疲れし、発生がやや助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	モザイク病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春きゅうり (促成栽培)	灰色かび病	平年:遅 前年:—	平年:並 前年:—	平年より遅い4月第1半旬に初発が確認されたが、その後の発生量は少なかったため、発生量は平年並となった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	褐斑病	平年:遅 前年:早	平年:少 前年:並	平年より遅い2月第1半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年より少なくなった。	3～4月は気温が平年より高く、十分に換気が行われたため、発生が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	菌核病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春きゅうり (促成栽培)	黄化えそ病	平年:早 前年:早	平年:やや少 前年:少	平年より早い1月第6半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	一部ハウスで前作からの保毒虫の持越しで、発生が早くなった可能性がある。防除対策の徹底により、発生は抑制された。	媒介虫への総合防除対策が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	退緑黄化病	平年:早 前年:遅	平年:並 前年:少	平年より早い4月第1半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年並となった。	3～4月は気温が平年より高く、換気がよく行われたため飛込虫が増えた。	媒介虫への総合防除対策が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	アザミウマ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い4月第1半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	3～4月は気温が平年より高く、換気がよく行われたため飛込虫が増えた。	物理的防除や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	コナジラミ類	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年より遅い4月第4半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	3～4月は気温が平年より高く、換気がよく行われたため飛込虫が増えた。	物理的防除や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハモグリバエ類	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	4月第2半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移した。	3～5月は気温が平年より高く、換気がよく行われたため飛込虫が増えた。	物理的防除が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハダニ類	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:多	平年より遅い5月第1半旬に初発が確認され、その後の発生量は少なく推移したため、発生量は平年並となった。	定期的な薬剤散布により、発生時期を栽培終了間際まで遅らせることができた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春きゅうり (促成栽培)	アブラムシ類	平年:遅 前年:早	平年:多 前年:多	平年より遅い4月第1半旬に初発が確認され、発生量も多く推移したため、発生量は平年より多くなった。5月以降は発生量が減少した。	3～4月は気温が高く換気も行われたため、飛込により発生が一時的に増加した。	物理的防除が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	物理的防除が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	物理的防除が実施されている。
ブロッコリー	黒腐病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	べと病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	軟腐病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	花蕾腐敗病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	菌核病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	黒斑細菌病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	黒すす病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	10月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	9月の高温多雨により発生が助長されたが、その後の低温少雨により発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や他の病害との同時防除で対応している。
ブロッコリー	アブラムシ類	平年:遅 前年:—	平年:やや多 前年:—	平年より遅い11月第1半旬に初発が確認され、発生量は平年よりやや多くなった。	有翅虫の飛来により発生が確認されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	コナガ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平年:早 前年:早	平年:並 前年:並	平年より早い8月第6半旬に初発が確認され、発生量は平年並となった。	7～8月の高温により発生が助長され育苗後半あるいは定植時に処理した薬剤による防除効果が切れたタイミングで発生した。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。
ブロッコリー	オオタバコガ	平年:— 前年:早	平年:並 前年:—	前年より早い10月第1半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されず、発生量は平年並となった。	7～9月の高温により発生が助長され、フェロモントラップ誘殺数も平年より多かったが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。
ブロッコリー	ヨトウガ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	11月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	卵塊がふ化した直後のため発生が確認されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。
ブロッコリー	ハイマダラノメイガ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
ブロッコリー	シロイチモジヨトウ	平年:早 前年:早	平年:— 前年:多	平年より早い8月第6半旬に初発が確認され、発生量は前年より多くなった。	7～8月の高温により発生が助長され、フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	さび病	平年:やや早 前年:早	平年:多 前年:多	平年よりやや早い5月第4半旬に初発を確認し、6月に急増したため、発生量は平年より多くなった。7月以降は発生が確認されなかった。	4、5月の多雨により発生が助長されたが、6月下旬以降の高温により、発生が抑制された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	黒斑病	平年:早 前年:早	平年:並 前年:やや少	平年より早い6月第4半旬に初発を確認し、6月は発生が多かったが、その後減少し発生量は平年並となった。	梅雨の影響で一時的に多発したが、その後の高温少雨により発生が停滞し、9月以降の発生も抑制された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	萎縮病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
秋冬ねぎ	べと病	平年:早 前年:早	平年:やや多 前年:多	平年より早い6月第1半旬に初発が確認され、発生量は平年よりやや多くなった。7月以降は発生が確認されなかった。	梅雨の影響で一時的に多発したが、その後の高温少雨により発生が停滞し、9月以降の発生も抑制された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	軟腐病	平年:並 前年:—	平年:やや多 前年:—	平年並の8月第4半旬に初発を確認し、9月～10月に増加したため、発生量は平年よりやや多くなった。	9月の高温多雨により、発生が助長された。	排水対策等の耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	小菌核腐敗病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
秋冬ねぎ	白絹病	平年:遅 前年:遅	平年:やや多 前年:多	平年より遅い8月第4半旬に初発を確認し、一時的に発生が多くなったが、その後は発生が確認されなかった。	6～7月の高温により、発生が助長された。9月上旬に大雨が降り発生が抑制された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	黒腐菌核病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	1月第4半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	1月上旬～中旬の高温により、発生が助長されたが、その後収穫期を迎えたため、発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
秋冬ねぎ	シロイチモジヨトウ	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年より早い6月第1半旬に初発を確認し、その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	7～9月の高温により発生が助長され、フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。7、9月に注意報が発令され、薬剤散布されたものの、ほ場被害は減少しなかった。
秋冬ねぎ	アブラムシ類	平年:遅 前年:—	平年:多 前年:—	平年より遅い3月第6半旬に初発を確認し、一時的に増加したが、5月以降はほぼ発生が確認されなかった。	3月～4月の高温により、発生が助長された。	他の害虫との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	ネギハモグリバエ	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年より早い6月第6半旬に初発を確認し、その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	6月下旬～11月にかけて高温となる時期が多く、発生が助長された。B系統の発生により被害が増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギアザミウマ	平年:早 前年:早	平年:やや多 前年:並	平年より早い4月第1半旬に初発を確認し、その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年よりやや多かった。	3月～11月にかけて高温となる時期が多く、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギコガ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
さといも	汚斑病	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
さといも	疫病	平年:並 前年:並	平年:— 前年:少	平年並の9月第3半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。極めてわずかな発生だったため、発生量は前年より少なくなった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	ドローンでの薬剤散布が行われるなど防除が徹底された。
さといも	アブラムシ類	平年:早 前年:早	平年:やや少 前年:並	平年より早い5月第4半旬に初発を確認し、その後も継続して発生が確認されたが、発生量は平年よりやや少なかった。	4月～5月にかけて高温となる時期が多く、生育初期から発生が助長されたが、適期防除が行われ、期間を通じての発生量は抑制された。	疫病防除のため、薬剤散布回数が増加した。それに伴い、殺虫剤を散布する機会も増加した。
さといも	ハダニ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
さといも	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	べと病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	立枯病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	アブラムシ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	アザミウマ類	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:—	平年:並 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	ケナガコナダニ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
冬春ほうれんそう	シロオビノメイガ	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	10月第4半旬に初発を確認したが、わずかな発生だったため、その後は発生が確認されなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	播種時の粒剤施用をはじめ薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
いちご (育苗期)	灰色かび病	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (育苗期)	うどんこ病	平年:遅 前年:早	平年:並 前年:—	平年より遅い6月第1半旬に初発を確認し、一時的に増加したが、8月以降は発生が確認されず、発生量は平年並となった。	適正な肥培管理や適期防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	耐性菌対策を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
いちご (育苗期)	炭疽病	平年:遅 前年:—	平年:並 前年:—	平年より遅い7月第3半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年並となった。	感染が拡がりやすい地床育苗が行われているハウスで、継続的な発生がみられた。一方、ベンチ育苗では早期抜き取りにより発生は一時的なものとなった。	耕種的防除の実施。親株として優良株の導入を図っている。
いちご (育苗期)	萎黄病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (育苗期)	輪斑病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (育苗期)	ハスモンヨトウ	平年:遅 前年:早	平年:並 前年:—	平年より遅い7月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年並となった。	7～8月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (育苗期)	アザミウマ類	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	6月第1半旬に初発を確認したが、その後もわずかな発生にとどまった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	—
いちご (育苗期)	アブラムシ類	平年:早 前年:並	平年:並 前年:—	平年より早い5月第2半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年並となった。	5月～8月の高温により発生が助長された。	他の害虫との同時防除で対応している。
いちご (育苗期)	ハダニ類	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	平年よりやや早い5月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	5月～8月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (育苗期)	ホコリダニ類	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (育苗期)	コナジラミ類(オンシツ)	平年:早 前年:—	平年:多 前年:—	平年より早い5月第4半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	5月～8月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	灰色かび病	平年:やや早 前年:遅	平年:多 前年:多	平年よりやや早い12月第3半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	12月～1月の低温により、ハウスを閉め切ったため発生が助長された。また、2月以降は気温が高く果実の成熟が促進された結果、収穫遅れの果実が増加し、発生が助長された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	うどんこ病	平年:早 前年:早	平年:やや少 前年:多	平年より早い10月第1半旬に初発を確認したが、その後はわずかな発生にとどまったため、発生量は平年よりやや少なかった。	適正な肥培管理や適期防除が行われた結果、発生は一部ハウスに留まり、全体的な発生は抑制された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	炭疽病	平年:— 前年:遅	平年:やや少 前年:—	前年より遅い10月第6半旬に初発を確認したが、わずかな発生だったため、その後は発生が確認されず、発生量は平年よりやや少なかった。	早期抜き取りや適期防除が行われた結果、発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	萎黄病	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:並	平年より遅い10月第6半旬に初発を確認したが、わずかな発生だったため、発生量は平年よりやや少なかった。	早期抜き取りや適期防除が行われた結果、発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	輪斑病	平年:— 前年:—	平年:やや少 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (生育・収穫期)	ハスモンヨトウ	平年:— 前年:並	平年:少 前年:—	前年並の9月第6半旬に初発を確認し、一時的に増加したが、継続的な発生は確認されず、発生量は平年より少なかった。	9月の高温により発生が助長されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	アザミウマ類	平年:早 前年:早	平年:多 前年:やや多	平年より早い9月第6半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	9月の高温により一時的に発生した。その後は気温低下に伴い発生が停滞したが、2月以降の高温に伴い発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	アブラムシ類	平年:並 前年:遅	平年:やや少 前年:少	平年並の10月第4半旬に初発を確認したが、わずかな発生だったため、発生量は平年よりやや少なかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	ハダニ類	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:少	平年より遅い11月第3半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年並となった。	11～2月の高温や乾燥により発生が助長されたが、適期防除や天敵導入が行われた結果、発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布や、天敵の活用によるIPM防除が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	ホコリダニ類	平年:— 前年:—	平年:— 前年:—	発生が確認されなかった。	—	—
いちご (生育・収穫期)	コナジラミ類(オンシツ)	平年:早 前年:早	平年:多 前年:やや多	平年より早い9月第6半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	11～4月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

イ 令和4年度 病害虫発生程度別及び防除面積

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
早期水稲 13,500ha (5月中旬までの移植)	苗立枯病					-		
	苗いもち					-		
	葉いもち	0	0	0	71	71	6750	6750
	穂いもち	0	0	0	0	0	0	0
	紋枯病	1	46	663	3821	4531	10800	10800
	白葉枯病							
	ばか苗病					0	6750	6750
	イネシガラレセンチュウ					-		
	イネシガラレセンチュウ(種子消毒)					0	10800	10800
	もみ枯細菌病					-		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					0	10800	10800
	ごま葉枯病					-		
	小粒菌核病					-		
	黄化萎縮病					-		
	縮葉枯病	0	1	46	990	1037	6750	6750
	黒すじ萎縮病					-		
	萎縮病					-		
	黄萎病					-		
	稲こうじ病					0	10800	10800
	褐色菌核病					-		
	赤色菌核病					-		
	葉しょう褐変病					-		
	褐色葉枯病					-		
	苗立枯細菌病					-		
	ニカメイガ	0	0	0	72	72	6750	6750
	セジロウンカ	2	51	560	3038	3651	6750	6750
	トビイロウンカ					0	6750	6750
	ヒメビウンカ	3431	6638	3112	313	13494	6750	6750
	ツマグロヨコバイ	663	1505	2833	3782	8783	6750	6750
	イネハモグリバエ					-		
	イネミギワバエ					-		
	イネキモグリバエ					-		
	イネドロオイムシ	0	0	1	275	276	1300	1300
イネゾウムシ					-			
イネクロカメムシ					-			
斑点米カメムシ類	0	0	1	275	276	5400	5400	
イチモンジセセリ					0			
フタオビコヤガ					0			
イネヨトウ					-			
アワヨトウ					-			
コブノメイガ					-			
イネミズゾウムシ	2	36	362	2146	2546	1300	1300	
スクミリンゴガイ	0	0	0	3	3	30	30	
普通期水稲 16,500ha (5月下旬以降の移植)	苗立枯病					-		
	苗いもち					-		
	葉いもち	0	0	23	973	996	13200	13200
	穂いもち				34	34	13200	13200
	紋枯病	121	602	1192	4443	7128	13200	13200
	白葉枯病					0	0	0
	ばか苗病					0	6600	6600
	イネシガラレセンチュウ	0	0	0	34	34		
	イネシガラレセンチュウ(種子消毒)					-	13200	13200
	もみ枯細菌病					0		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					-	13200	13200
	ごま葉枯病					-		
	小粒菌核病					-		
	黄化萎縮病					-		
	縮葉枯病	0	0	9	639	648	13200	13200
	黒すじ萎縮病					-		
	萎縮病					-		
	黄萎病					-		
稲こうじ病	0	0	0	0	0	13200	13200	

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
普通期水稻 (5月下旬以降の 移植)	褐色菌核病					-		
	赤色菌核病					-		
	葉しょう褐変病					-		
	褐色葉枯病					-		
	苗立枯細菌病					-		
	ニカメイガ	0	0	0	172	172	13200	13200
	セジロウンカ	0	35	810	5535	6380	13200	13200
	トビイロウンカ	0	0	9	639	648	13200	13200
	ヒメビウンカ	4538	7423	3936	581	16479	13200	13200
	ツマグロヨコバイ	3	78	798	4005	4885	13200	13200
	イネハモグリバエ					-		
	イネミギワバエ					-		
	イネキモグリバエ					-		
	イネドロオイムシ	0	0	0	34	34	13200	13200
	イネゾウムシ					-		
	イネクロカメムシ					-		
	斑点米カメムシ類	696	1265	2370	3671	8002	8250	8250
	イチモンジセセリ	2	33	305	1862	2202	8250	8250
	フタオビコヤガ					0	8250	8250
	イネヨトウ					-		
アワヨトウ					-			
コブノメイガ	0	0	9	639	648	8250	8250	
イネミズゾウムシ					0			
スクミリンゴガイ	121	602	1992	4413	7128	750	750	
麦 6,050ha	黒さび病					0		
	赤さび病	0	0	0	164	164	1200	1200
	黄さび病					0		
	小ささび病					0		
	うどんこ病	39	183	602	1414	2239	1800	1800
	赤かび病	0	0	0	49	49	1800	1800
	雪腐病類					-		
	黒穂病類					0		
	黒節病	0	0	0	1	1	600	600
	麦類縮萎縮病					-		
	小麦縮萎縮病					0		
	大麦縮萎縮病					0		
	雲形病					-		
	斑葉病					-		
	株腐病					-		
	立枯病					-		
	アブラムシ類	0	0	0	360	360	1200	1200
	ムギアカタマバエ					-		
	ハモグリバエ類					-		
	ムギダニ					0		
かんしょ 383ha	かいよう病					-		
	つる割病					0	50	50
	立枯病					0	50	50
	イモキバガ					0		
	ナカジロシタバ					0	50	50
	ハスモンヨトウ	0	0	0	211	211	200	300
	シロイチモジヨトウ					-		
	ヨツモンカメノコハムシ					-		
コガネムシ類					0	150	200	
大豆 619ha	紫斑病					0		
	さび病					-		
	菌核病					-		
	立枯性病害					0	300	300
	炭疽病					-		
	黒とう病					-		
	べと病	16	53	125	190	384	300	300
葉焼病	70	75	105	128	379	300	300	
モザイク病					-			

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
大豆	萎縮病					-		
	わい化病					-		
	アブラムシ類	0	0	0	1	1	300	600
	タネバエ					-		
	コガネムシ類	11	28	66	126	232	300	300
	ハスモンヨトウ	1	5	27	102	134	300	600
	食葉性チョウ目幼虫	0	13	395	210	618	300	600
	ハダニ類					-		
	ダイズサヤタマバエ				6	6	300	300
	マメヒメサヤムシガ					-		
	マメシクイガ	26	47	89	138	300	300	300
	シロイチモジマダラメイガ	0	0	7	70	78	300	300
	吸実性カメムシ類	33	128	227	176	564	300	450
	ウコンノメイガ					0		
	フタスジヒメハムシ					-		
ヒメサヤムシ類	0	0	0	24	24	300	300	
なし 395ha	黒斑病					0		
	黒星病				1	1	395	395
	赤星病				1	1	395	790
	うどんこ病	13	27	54	87	181	395	790
	輪紋病					0		
	ナシヒメシクイ	5	12	29	61	106	395	1185
	モモシクイガ					-		
	ナシマダラメイガ					-		
	ハマキムシ類					0		
	ハダニ類	22	43	78	104	247	395	1185
	カメムシ類					0	395	1975
	カイガラムシ類	0	0	0	1	1	395	395
	アブラムシ類	0	1	13	91	105	395	395
	ニセナシサビダニ	0	0	0	3	3		
	吸ガ類					-		
ナシチビガ					-			
茶 825ha	炭疽病	0	0	0	454	454	800	1600
	もち病					0		
	網もち病					-		
	輪斑病	0	0	0	454	454	800	1600
	チャノコカクモンハマキ	0	4	31	150	185	800	2400
	チャハマキ	75	88	132	172	467	800	2400
	チャノホソガ	0	4	31	150	185	800	2400
	チャノミドリヒメヨコバイ	100	154	213	202	669	800	2400
	カンザワハダニ	14	51	133	236	434	800	2400
	チャノキイロアザミウマ	0	0	0	464	775	800	1600
	ツマグロアオカスミカメ	5	22	73	175	276	800	1600
	クワシロカイガラムシ	2	11	43	131	186	800	1200
	ヨモギエダシャク	0	0	5	70	75	800	800
	その他(チャトゲコナジラミ)	0	0	55	540	595	800	1600
	冬春トマト 118ha	疫病					0	
灰色かび病		0	0	0	1	1	110	330
モザイク病						-		
葉かび病						0		
青枯病						0		
萎ちょう病						0		
うどんこ病		0	0	0	1	1	110	330
黄化葉巻病							110	330
アザミウマ類		0	0	0	0	0	110	330
オオタバコガ					0	0	110	110
コナジラミ類		0	0	0	5	5	110	330
ハモグリバエ類						-		
アブラムシ類						0	110	110
トマトサビダニ						0		
ハスモンヨトウ						0		

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
夏秋なす 255ha	うどんこ病	6	26	67	90	188	200	600
	灰色かび病					0		
	褐紋病	0	0	0	10	10	200	200
	褐色腐敗病	14	17	28	43	103	200	600
	半身萎ちょう病	31	22	29	37	119	200	600
	青枯病					0		
	アザミウマ類	69	32	35	37	173	200	800
	コナジラミ類	0	0	0	4	4	200	600
	オオタバコガ	2	8	25	56	91	200	400
	ハモグリバエ類					-	200	600
	アブラムシ類	0	0	5	43	49	200	600
	ハダニ類	32	151	69	3	255	200	600
	ハスモンヨトウ					0	200	600
ホコリダニ類	0	0	0	10	10	200	400	
夏秋きゅうり 335ha	べと病	1	8	34	90	134	300	300
	炭疽病					-		
	疫病					-		
	うどんこ病	0	3	17	63	83	300	300
	斑点細菌病					-		
	モザイク病					-		
	灰色かび病					0		
	褐斑病	0	1	10	48	60	300	300
	菌核病					0		
	黄化えそ病	0	0	0	20	20		
	退緑黄化病	8	24	54	90	176		
	アザミウマ類	0	0	0	8	8	300	600
	ハダニ類					0	300	300
	アブラムシ類					0		
	コナジラミ類	0	0	0	15	15	300	600
	ハモグリバエ類	4	10	24	52	90	300	300
ワタヘリクロノメイガ					0	300	300	
オオタバコガ					-			
ハスモンヨトウ	0	0	0	9	9	300	300	
冬春きゅうり 257ha	べと病	0	0	0	19	19	250	750
	炭疽病					-		
	疫病					-		
	うどんこ病	6	12	25	46	90	250	750
	斑点細菌病					-		
	モザイク病					0		
	灰色かび病	0	0	0	2	2	250	750
	褐斑病					0	250	750
	菌核病					0	250	750
	黄化えそ病	0	0	0	7	7		
	退緑黄化病	0	0	0	11	11		
	アザミウマ類					0	250	750
	ハダニ類	0	0	0	11	11	250	750
	アブラムシ類	0	0	0	15	16		
	コナジラミ類					0	250	500
	ハモグリバエ類					0		
ワタヘリクロノメイガ					0			
オオタバコガ					-			
ハスモンヨトウ					0			

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
ブロッコリー 1,202ha	黒腐病					0		
	べと病					0		
	アブラムシ類	0	0	0	17	17	1000	1000
	コナガ					-	1000	1000
	ハスモンヨトウ	0	0	0	17	17	1000	1000
秋冬ねぎ 1,870ha	さび病	261	211	278	336	1086	1000	3000
	黒斑病	1	12	72	297	383	1000	3000
	萎縮病					0		
	べと病	0	0	7	153	160	1000	3000
	軟腐病	0	0	8	195	203	1000	1000
	シロイチモジヨトウ	317	795	617	134	1863	1000	2000
	ハスモンヨトウ					0	1000	2000
	アブラムシ類	0	3	38	268	310	1000	1000
	ネギハモグリバエ	110	184	318	444	1056	1000	3000
	ネギアザミウマ	527	408	408	320	1653	1000	3000
さといも 803ha	ネギコガ					0		
	汚斑病					0		
	モザイク病					-		
	疫病	0	0	0	11	11	300	900
	アブラムシ類	0	8	51	193	253	300	300
	ハダニ類					0		
ほうれんそう 2,023ha	ハスモンヨトウ					0	300	300
	べと病					0		
	モザイク病					0		
	シロイチモジヨトウ					-		
	アブラムシ類					0		
	ヨトウガ					-		
いちご 105ha	シロオビノメイガ					0		
	灰色かび病	0	0	0	12	13	50	150
	うどんこ病	0	0	0	2	2	50	150
	モザイク病					-		
	炭疽病					-		
	萎黄病					0		
	アブラムシ類	0	0	0	6	6	100	200
	アザミウマ類	21	31	31	17	100	100	200
	コナジラミ類	0	0	6	33	39	50	100
ハダニ類	7	10	16	22	55	100	200	
ハスモンヨトウ					-			

(4) 令和4年度の病害虫発生予察情報等の発信

ア 病害虫発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況

(ア) 警報

なし

(イ) 注意報

発表年月日	内 容
令和4年7月11日	ネギ、さび病
令和4年7月27日	野菜類・花き類、オオタバコガ
令和4年7月27日	ネギ、シロイチモジヨトウ
令和4年9月8日	野菜類・花き類・ダイズ、オオタバコガ
令和4年9月22日	ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ

(ウ) 特殊報

発表年月日	内 容
令和4年10月21日	タバコノミハムシの発生について

(エ) 発生予報

予報月	発表年月日	予報月	発表年月日
5月	令和4年4月27日	11月	令和4年10月26日
6月	令和4年5月26日	12月	令和4年11月25日
7月	令和4年6月24日	1月	令和4年12月22日
8月	令和4年7月27日	2月	令和5年1月25日
9月	令和4年8月26日	3月	令和5年2月27日
10月	令和4年9月28日	4月	令和5年3月24日

(オ) 注意を促すための情報

a 病害虫防除情報

防除時期が限定される病害虫や予報に合わせ、特に注意を促す必要がある病害虫について病害虫防除情報としてホームページ上で発信した。

発表年月日	作物別	内 容
令和4年7月12日	果樹	なしの果樹カメムシ類について
令和4年7月28日	普通作物	稲の斑点米カメムシ類について
令和4年9月5日	茶	チャのチャノキイロアザミウマについて
令和4年10月26日	普通作物	ダイズの吸実性カメムシ類について

b 調査結果等

病害虫の適期防除を促すため調査結果をホームページ上で発信した。

発表時期	内 容
令和4年4月～ 令和5年3月	各種フェロモントラップ等データ
令和4年5月27日	麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度調査結果
令和4年6～8月	いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況
令和4年6～7月	気象予測データによるウンカ飛来予測状況（トビイロウンカ、セジロウンカ）
令和4年7月5日	イネツトムシ発育予測
令和4年7月5日	フタオビコヤガ（イネアオムシ）発育予測
令和4年7月26日	いもち病（葉いもち）発生状況調査結果
令和4年7月26日	水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果
令和5年2月3日	ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果
令和5年3月2日	果樹カメムシ類の越冬密度調査結果

イ 発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病虫害発生現況報告等の外部への提供

国（植物防疫課）、関東農政局及び日本植物防疫協会に、発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病虫害発生現況報告等を提供した。

植物防疫に関するデータベースサービスである J P P - N E T（運用主体：日本植物防疫協会）によって、病虫害防除に関する情報交換を国及び他県等と行い、発生予察及び防除指導に活用した。

ウ 発生予察ツールを用いた発生消長予測情報の提供

県で開発したツールを用いて、気象台の気温データと害虫ごとの発育パラメータから今後の害虫の発生消長を予測し、フェロモントラップデータとともにホームページを通じて情報提供した。

・ナシヒメシンクイ 提供日：6月21日、7月5日、7月21日

・ハスモンヨトウ 提供日：8月19日、9月5日、9月20日

その他に、5月のヒメトビウンカ麦類叩き出し調査（第1世代幼虫対象）における実施時期の決定にも用いた。